

令和元年度 第1回外部評価モデル小委員会 議事概要

- I. 日 時：令和元年8月26日（月） 10:00～12:00
- II. 場 所：公益社団法人 私立大学情報教育協会事務局
- III. 出席者：角田担当理事、大原小委員長、片岡委員、中村委員、佐渡友委員、竹内委員、
前田委員、事務局：井端事務局長、中村

IV. 議事概要

担当理事の挨拶、委員の紹介後、小委員長の選任が行われ、大原 茂之氏が選出され、議長として議事を進めた。

1. 報告事項

(1) 本協会の2019年度事業計画における小委員会の位置付け

問題発見・解決型PBL教育での達成度を評価する仕組みとして、従来の知識の量や正確性の評価に加えて、筋道を立てて論理的に説明する能力、多面的・多角的に分析し最適解を探求する批判的思考力、合理的判断力、創造力、科学的な考察力、論旨明快な表現力などの到達度を第三者のビデオ試問で点検し、その結果をフィードバックして振り返りを通して身につけられるよう訓練する外部評価モデルを研究するため、2019年度事業計画で「外部評価モデル小委員会」を設置したことが事務局長から報告された。

(2) 外部評価モデル策定の経緯と分野連携対話集会での反応

本協会が平成24年度に上梓した「未知の時代を切り拓く教育とICT活用」の中で、試験対策としての暗記型学修から本質を捉える学修に変えていく質保証の出口対策として、クラウドを介して学外有識者がビデオ試問し、記述方式で回答をクラウドに返信する外部評価モデルの仕組みを発表した。5年後、平成29年度の「地域別事業活動報告交流会」で説明したところ、多くの大学からモデルの導入について積極的な意見が見られたことを受けて、理事会としてアクティブラーニング対話集会で議論を深めることになった。平成30年度の対話集会では、振り返りを学年進行の中で体験し、卒業までに思考力等の能力要素を身につけられるよう訓練することを目指す仕組みとして、参加者に挙手を求めたところどのグループも反対はないが、半数程度の賛同にとどまったことから、今後、外部試験というイメージの払拭に留意して研究を続けることが事務局長から報告された。

2. 検討事項

(1) 外部評価モデルの詳細設計に向けた課題の洗い出し

資料⑦の「学修成果の質保証に向けた外部評価モデル構想の提案」について、事務局長、大原小委員長から説明が行われた後、主に次のような意見交流が行われた。

- ① 分野横断の外部評価モデルのための問題を作るために、どういうコア・コンピタンスを作っていくのか、各学部、各学年、分野ごとに検討されているのかどうか。
- ② 分野横断PBLでは、それぞれの専門分野を背景にして学部、大学院、社会人などの中で答えの定まらない問題の学びを考えている。アウトカムは単位の取得ではなく、論理の展開力など他では得られない思考力、考察力、創造力などの認定を得ることだけで十分ではないか。
- ③ 学生のインセンティブは単位なので、単位と関係ないとなった時に学生がどういうふうにインセンティブをここに入れるのか。
- ④ 学生に対するインセンティブを我々が与えるのではなく、インセンティブはあくまでも学生自身がどう考えるかで、スタートラインが全然違う。学生全員に同じコンテンツを提供して同じように評価するという画一的な時学修ではなく、熱意や夢を持つなど学びにモチベーションもっている学

生を集めて世界に通じる人材を育成していくことを目指している。

- ⑤ ここで提案するモデルは、外部評価が目的ではない。クラウドファンディングも評価の一つと考えていい。失敗してもフィードバックによって学生がどのように学びを改善していくかを評価する。この能力が弱いからもっと伸ばそうとすることにつながればいい。夢を実現するにはこうしたらいよいよというアドバイスができることを考えている。
- ⑥ 分野連携対話集会では、半数近く教員が拒絶するので聞いてみると、外部試験と思ってしまい、「そんな試験はやらないよ」という意味らしい。最終評価の試験ではなく、振り返りの気づきを支援する仕組みということが浸透していないので、明記することが必要ではないか。
- ⑦ 「評価」という言葉が先行してしまっていて誤解を招いているように思う。外部アドバイザリーボードなど工夫してはどうか。
- ⑧ 多くの大学で河合塾のPROG試験を採用している。入学年次と卒業年次などに行い、成績には反映されない。学びで伸張した点、伸張が思わしくない点を提示し、学生の気づきを促進している。モデルはそれに近いところがあるような気がする。ディプロマサプリメントにこの評価内容をリーダーチャート化できれば、社会からも評価が得られるようになるかもしれないので、学生の気づきに反映させられるようなことができれば、教育プログラムの改善にも利用できる。
- ⑨ 学生が特定の分野を背景にして、分野横断の中で視野を広げて物事を考えられるようになることを目指す。多面的に見ることで不足する視点も含めて、問題を考えなければいけないという文脈ができるのではないか。
- ⑩ 分野横断型PBLでは、日本の社会問題、SDGsの世界的な開発目標を集積し、問題を作る作業が必要になってくる。
- ⑪ 私情協でパイロットを考えるが、本来はどこかの拠点となる大学が考えていただくことを期待している。小委員会の目的はモデルの枠組みを考えることにしているが、有効性の検証までは必要と考えている。

(2) 検討事項の大枠を決定

資料⑧の「検討事項の大枠(メモ)」に沿って進めることを確認した。

(3) 検討の進め方と検討日程

資料⑨の「検討日程(メモ)」について、第一段階として分野連携合同会議の3回目に検討結果を報告できるようにするため、10月中旬までに小委員会を3回開催することを目指す。

第二段階は、対話集会開催後に意見を踏まえて1月下旬から3月上旬までに小委員会を開催することにした。

(4) その他(次回開催日程の決定)

次回は、9月18日(水)午前10時に開催することを決定した。